まい　あーと■油絵「風の塔（II）」by 大山　学

キンポウゲ科

アズマイチゲ 撮影：宮城六郎

ユリ科

ヒロハアマナ 撮影：野嶋好雄

キバナノアマナ 撮影：渋谷綾子

関東各地で見られる**アズマイチゲ**は、日が当たると全開する。東京の郊外では春分の日のころに咲く。**アズマイチゲ**の白い清純な姿に魅せられて、毎年同じ場所に通っているが、訪れる日が晴れている日だけとは限らない。

曇っている日には半開き、雨の日には閉じてしまうというむずかしい花であることを知った。

このころには、ユリ科の**ヒロハアマナ**、**キバナノアマナ**、などが次々と咲き揃うので俄に忙しくなると同時に、楽しみの季節でもある。

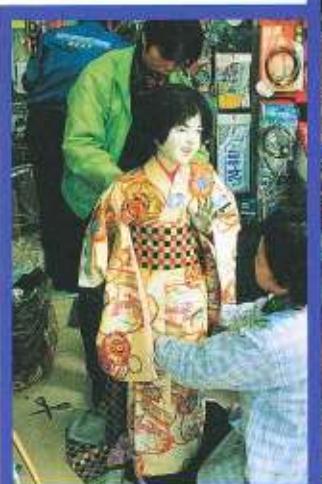
アズマイチゲ

ヒロハアマナ(左)
キバナノアマナ(右)

大野さんちのお嬢さん①

～冬から春へ～

大野サイクル（高松町３丁目）の店頭に立ってもう15年。すっかり大野家の末娘となってしまった彼女が、春をむかえて軽やかに衣がえです。おばあちゃんの倍子さん（75）のお見立てによる自慢のコレクションを披露してもらいました。そういえば、彼女にはまだ名前がありません。でもそれは、ちっとも悲しいことではないのです。なぜなら、彼女を愛する近所の人たちが、めいめい自分だけの名前で呼びかけてくれるから。どうやらすでに、彼女は自転車屋さんの看板娘から、立川通りの看板娘になっていたようです。

冬

日頃、立川通りを使っておられる方にはお馴染みであろう、大野サイクルさんのマネキン人形。もともとは15年ほど前に、当時流行したアニメの登場人物が描かれた子供用自転車の宣伝のために置かれたものだそう。当初は、アニメに出て来るままの衣装をまとっていたが「女の子だからお洒落してあげないと」と、倍子さんが普段着を用意し着せ替え始めた。現在は月に２～３回、ご主人の武雄さん（79）やお嫁さんのとも子さん（48）も手伝って衣装替えをしている。服は折々の季節にあわせ、バッカリ市などでリサイクル品を安く購入。可愛い“孫娘”のためにあれこれ選ぶのも楽しみのひとつだと倍子さんは笑う。「大野サイクルと言ってわからない方でも『お人形さんの自転車屋』と言えばすぐわかってくれます」人形は家族の一員として、看板娘のお役を立派に勤めている。

春

一番町6丁目。通称「イチロク駐在」の名物お巡りさん、大久保晋さん。

本格バーマン登場。バー「タイム・テーブル」マスター。森田恵祐さん。

彫刻家の吉岡ひろさんからお手製の掛軸をプレゼント。三田鶴吉さん。

「お目出とうございます！」篠武士さんのマジックが会場を湧かす。

～12年目の『ベスト立川人・展』が教えてくれたもの～

新春恒例『ベスト立川人・展』が今年も1月14日からの9日間、駅ビル・ルミネギャラリーで催され、盛況のうちに終了した。今年も初日の夕刻からはオープニングパーティーが開かれ、新旧あわせて百名ものベスト立川人が集合。終始和やかな交流がくりひろげられた。時代の風に乗って輝きを放つのも良し。しかし周囲にとらわれず、飄々としながらも力強く自分を表現している人。今年登場した方の多くからそんな香りが漂う。駅周辺を中心に刻々と生まれ変わる街並。だが立川気質は決して変わることはない。12年目の「ベスト立川人・展」は静かで、そして熱かった。

変わりゆく街並、しかし 立川スピリットは変わらず

今年で12回目をむかえた『ベスト立川人・展』は、新装になった立川駅ビル・ルミネギャラリーにおいて1月14日から催された。今年ご登場いただいたのは15人と2グループ。その皆さんと、かつてご登場のベスト立川人OBが一同に会し、初日の夕方から恒例のオープニング・パーティーが開かれた。

会場が例年と変わった関係で、定刻よりやや遅れてパーティーはスタート。しかし、立川市長・青木久さんのご挨拶、恒例となった三田鶴吉さんの音頭による乾杯と続くと、すでに会場はすっかりいつもの〝立川人・展パーティー〟の空気と化す。場所が変わっても「タチカワを称えよう」という想いのもとに集まった人ばかり、一瞬にして交観の場は盛り上がりを見せる。和やかな雰囲気の中に、会場の彼方此方で熱い立川談義がくりひろげられた。

いよいよ宴もたけなわとなった頃、本誌編集長より今年ご登場のベスト立川人の紹介が始まった。パラリンピック水泳で堂々銅メダルを獲得、青木彰信君（栄町）はお母さんと出席。その栄誉に惜しみない拍手が贈られる。毎年乾杯の音頭をとってくださる三田鶴吉さんは、今年は二度目のベスト立川人として登場。立川文化の大黒柱の存在でパーティー全体の空気はさらに温もりを増す。若いチャレンジ精神で毎年記録を塗りかえる昭和第一学園機械研究部（栄町）の面々は立川人・展の常連。この日のために考案したというスペシャルマジックを披露してくださったのは篠武士さん（一番町）。『無庵』ご主人竹内洋介さん（曙町）が登場すると時ならぬ蕎麦談義が始まり竹内さんに質問が殺到。その熱気冷めやらぬまま、立川に久々現れた本格バーマン森田恵祐さん（曙町）が紹介される。50年近くもの歳月をかけ日本百名山を踏破した小安崇さん（上砂町）。市民映画祭で映写機を操る筋金入りの機械好き、池畑泰夫さん（一番町）。スポーツダンス界に尽力する望月文夫さん（羽衣町）。立川錦都祭囃子コンクール優勝、立川錦囃子連（錦町）からは代表で小川芳明さんが出席してくださった。大久保晋さん（一番町）はわが町の「駐在」さん。最後に、長年たった一人で夜回りを続ける五十嵐タカネさんが登場。拍手の中にこの日出席されたベスト立川人のご紹介が終了した。

パーティー閉会の言葉はこれも例年通り谷川水車さん。また来年会いましょうの言葉で和やかな夕べは閉幕となった。

様々な分野からの登場は例年のベスト立川人・展と同様だが、今年特筆すべきは、自分の「歩幅」を確実に持っている方ばかりだということ。変化のスピードが速い現代にあって常に自分を見失わずにいることは容易ではない。今年登場の方々は皆、それを飄々とやってのけている。日を追うごとに変わっていく立川の街並だが、こんな人たちがいるからこそ、この街の面白さは決して変わらない。そう確信させられる今年のベスト立川人・展であった。

閉会の辞はやっぱりこの方。「また来年会いましょう」。谷川水車さん。

96年の夏は立川も熱かった。パラリンピック銅メダリスト、青木彰信君。

市民映画祭のフィルムはこの人の手で映し出される。映写技師の池畑さん。

修練と人の和で「東京一」。立川錦囃子連からは小川芳明さんが出席。

百番目の山は戸隠連峰の最高峰、高妻山。小安崇さんは御年72歳。

たったひとりで「火の用心」。五十嵐タカネさんは御姉妹で出席。

「蕎麦通とは？」出席者の質問に丁寧に応える「無庵」主人、竹内さん。

新屋敷誠先生率いる昭和第一学園高校機械研究部の若き〝研究者〟たち。

えくてびあんの輪

人がいて、街があります。
あなたがいて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも えくてびあん！

8ポ便り～団地暮らし近況～●武蔵野美術大学教授 横溝 健志

五日市街道沿いの団地に、できた当時から住んでもう三十年になるらしい。団地の真ん中にある広場で先月三十周年の記念行事をやっていたから間違いない。景品が出るというのでしばらく付き合っていたがクジに外れてしまった。子供たちもここで育ったからすっかり立川人なのだが、バスは国立へでるし、あまり住民意識のないままそれでも引っ越しの気も起こらずにまだ2DKにいる。

団地の2DKというのは、子供が三人もいるとまるで映画でみる潜水艦のなかみたいになるのだが、そんなところで奇跡のようにさっぱりと暮らしているらしいと住宅雑誌の取材の話があった。情けない話なのでお断りしたが、近くの美術大学の建築の先生が学生を連れて見学に来たこともあった。公団住宅の原型が保たれているよいサンプルなのだそうだ。確かに入居当時のまま手を入れるゆとりはなかったが、まるで文化遺産のようにいわれてこれも情けない。

狭さを嘆いてもしようがないから、子供が大きくなった頃には近くに小さな家を借りて仕事はそこでするようにした。家人の機織りの機械も3台ほど入ってたちまち物置みたいになったが、風呂場を利用できたので、重さを気にすることなく小さな活版の設備も置けた。活版印刷というのは、身近かには街のハンコ屋さんの店の片隅で名刺など刷っているあれのことである。もうひなびた街でしか見かけない。私も人に頼まれて、たまには名刺や挨拶状などを刷ることがあるが、印刷屋のふりを楽しむ個人的な遊びである。デザインとその教育に関わってきたから、お医者さんが絵をかくように朗らかには割り切れないところが後ろめたい。

いまでは、子供もいなくなった団地暮らしの近況を、8ポイント（文庫本の字の大きさ）の活字で組み、葉書の大きさに五十枚ほど刷って活版にウンチクのある仲間などに配っている。ワープロで打てばわけない拙文を、手間ヒマかけて活字で綴るこだわりは、活版の味わいとか文化の継承といった大げさなことではない。印刷の単純な仕組みと手の掛かりようが、親しい人への団地暮らしの報告には丁度よいのだろう。

たとえば、濁酒を造って「団地錦」という名前を付けたとか、外国人が泊まって可笑しかったといった他愛ない話なのだから、こんなごく内輪の話でも活字に組むことで人ごとみたいな振りができるということかもしれない。

いづれにしても、もう虫メガネを使わなければ字を拾えないし、痩せ我慢に似た老人の楽しみになってきた。「八ポ便り」の三九号は、暮れに当たった福引きでヨーロッパ旅行をする話になっている。

えくてびあんエッセイ●No.49

〔お詫びと訂正〕
先月号、えくてびあんエッセイ「志ん生さんのきせる」の中に、誤記がありました。本文二行目「一九五四年」とある所は「一九五七年」、本文十一行目「金生」は「全生」、本文後ろから五行目「鉛色」は「飴色」の誤りでした。お詫びして訂正させて頂きます。

表紙は語る

まいあーと 油絵「風の塔II」by 大山 学

1月。たましんギャラリーで催された『第3回アート'95展』にて、力作ぞろいの中にひときわ暖かな感触を残す作品を発見した。よし、次号の表紙はこちらをお借りしようと作者名を見るとなんと大山学さん（幸町）。本誌の表紙では昨年4月号以来、二度目の登場。どうやら大山さんの作品には、見る者に春を感じさせる「何か」があるようだ。

中学校で美術の教鞭をとりながら創作に励む大山さん。「休みの日にはのんびり空を眺めている事が多い」と語る。大空の下にすっくとそびえ立つ塔は、上背一八七センチ、長身の大山さんの姿と自然にだぶってしまう。春を感じさせる「何か」とは、きっと慌ただしい生活の中にぽっかりと置き忘れた、懐かしい〝受け身〟の時間なのかもしれない。

真如苑だより

新春、立春、早春と、春が名前を変えながらゆっくりと膨らんでいくように、新しい季節への希望がどんどん膨らむ三月は、同時にしめくくりの月でもあります。

新スタートを元気にふみ出せるように、春の真如苑で静かなひと時を御一緒しませんか。

■日時　3月19日(水)
　　　　2時～4時
■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。
■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

東風

先月も校正ミスを犯してしまった。ミス退治に妙案はないものであろうか。鈴木闊郎さんのエッセー『志ん生さんのきせる』の中に3つも誤植があると指摘されて、わがザル目さ加減にあきれるばかりである。ザル目とは、誤字脱字を惜し気もなくこぼしてしまう、底なしのザルのようなものであるという謂いである◆印刷所から刷り物が出来上がって、最初に手にするのは編集者である。手にとって、たまたま目が行った先に誤植が、悠然としてアグラをかいていることがある。単行本の場合、アトランダムに開いた頁に誤植があり、この分だと一冊の中には誤植だらけかと思えば、最初に見つけた一ヶ所だけという場合もある。◆私ごとになるが上智大学の名誉教授、横川文雄先生に序文を頂戴して、大切な文章なので丁寧に校正をし、また専門家にも見ていただいたが、刷り上がってパラパラッと頁をめくってみると「谷崎潤一郎」が「谷川潤一郎」になっている。校正ミスは詫びて済むという性質のものではない。これ程「あとの祭」的なものはないであろう。◆闊郎さんのエッセーは名文であるうえに力作であり、読む者を引き付けてやまない。志ん生にちなんで末のお嬢さんに「志生子」さんと命名する最後のフレーズなどは、思わずほろりとさせられる。嗚呼、誤植さえなければなあ◆えくてびあん　開かずにあり　春炬燵

（編集）池田隆男　小林康史　積川理　名尾照真　山田恵子　松本わかこ　大須賀久典
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　中村伸　五来幸平

月刊えくてびあん 第152号
平成九年三月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190
電話　○四二五（28）0082
FAX　○四二五（28）1297
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

ウォッチング 最終回

あたりまえ

錦町。とある印章店の壁に貼られた貼紙である。真赤な台紙に筆文字で「運がひらける印鑑を作るといわれたらそれはサギだ」と調子は穏やかではないが、よくよく考えたらこれは至極当然のこと。当たり前のことをこうしてわざわざ貼紙にせざるを得なかった御主人の心中、察して余りあるものがある。しかも、もともと看板や店頭の貼紙というものは店の性格や気質を語るもの。この貼紙がやたら目立ってしまうというご時勢、「当たり前」がむずかしい。

WATCHING

立川昆虫記

【モンキチョウ】

鱗翅目シロチョウ科

絵・文　中西　章　（若葉町）

雌は白い。幼虫の食草はシロツメクサ、ニセアカシアなどのマメ科植物。年に四、五回発生し、早春の三月タンポポの花の咲く頃から、秋おそく十一月頃まで各種の花で吸蜜し、幼虫で越冬する。日当りの良い草原が好きで、公園の芝生や、畑、河原に多い。地表附近を高速で飛ぶが、花に止まる時は翅を閉じて、ゆっくりと吸蜜するので、近づいて、観察出来る。緑色の眼、翅の縁のピンクなど美しいチョウである。以前は「オツネンチョウ」〝越年蝶〟と呼ばれ、成虫で越冬すると思われていたが、最近、幼虫越冬と改められた。昭和公園にコスモスの花が咲く頃、花上にとび交うこのチョウを毎年見に行くのが一つの楽しみである。